

中西家（吹田市岸部）旧蔵の作品群

— 絵画を中心に工芸など —

はじめに

江戸時代の吹田村（現在の吹田市）には、豊後竹田（現大分県）出身の画家田能村竹田（一七七七一—一八三五）が晩年に住居を構え、旅先の大坂（現大阪市）で亡くなっている。竹田は、九州、京都、大坂などを訪れて、詩、書、画のそれぞれに独自の作風を示した文人画家である。天保六年（一八三五）に吹田村を訪れ、《吹田村養痾図》（竹田市立歴史資料館）〔図1〕を描いた。画面には二棟の家屋が描かれ、その周辺には樹木が林立しており、手前には田畑が見られる。彼方には山岳が遠望される。筆致は、竹田特有の鋭く繊細な特質を見せるものではなく、擦れた筆致で、半ば茫洋とした雰囲気を漂わせている。病気の竹田による制作のため、そうだったのかどうか詳細は分からない。竹田の主治医で友人でもあった京の蘭学医の小石元瑞に贈られた作品で、親しい

友人間で交わされる文人画の典型的な絵画である。吹田市岸部にある元大庄屋の中西家にも、竹田と関係する資料が残されており、竹田と吹田村の関係は深く、ある意味では、旅先の大坂で亡くなったというよりは、吹田村で生涯を終えたといっても必ずしも間違いではない。平成二十九年（二〇一七）に吹田市立博物館で開催された「田能村竹田展——吹田・なにわを愛した文人画家——」を担当した市村茉莉学芸員の解説をまとめると、竹田は、天保四

中谷伸生



〔図1〕 田能村竹田
《吹田村養痾図》
（竹田市立歴史資料館蔵）

年（一八三三）に下関から大坂を経て京に着く。その後藩に帰った後、再度、『山中人饒舌』を刊行する準備のため、田能村直入を連れて京阪に旅立ち、天保五年（一八三四）に大坂に着き、大塩平八郎を訪ねた。天保六年（一八三五）一月に『山中人饒舌』を発売。三月に十一回目となる京阪への旅を始めた。一月八日に大坂に着く。その目的は、竹田の著書『山中人饒舌』の再校正と『近世画史』の出版準備のためであったという。天保六年（一八三五）一月二十四日に大坂に着いた竹田は、大塩平八郎と再会して親交を温めた。その後の六月下旬に京に入り、その後京や大坂をめぐる歩いて、七月十一日に吹田村知行所代官井内左門宅を訪れて滞在した。七月二十五日に外出したが、大雨に打たれるとともに暑さで体調を崩して高熱を出し、療養のため井内左門宅に身を寄せて療養の毎日となったが、七月二十日頃に大坂の中之島蔵屋敷へ移り、そこで二十九日に死去している。

本稿では、竹田ゆかりの吹田市に位置する中西家の旧蔵品を概観して、それらの価値と位置づけを行ってみたい。その際、最初に調査を行って展覧会を企画した寺澤慎吾氏の資料に基づきながら紹介することにする。しかし、ここで言う概観は、中西家旧蔵品の全容を示すものではなく、今後の調査研究に資するための部分スケッチだといっておく。中西家は、旧吉志部東村（現在の吹田市岸部中四丁目・五丁目）にあり、淀藩の庄屋・大庄屋であった。中西家には、数多くの美術工芸作品が遺存しており、江戸時

代の庄屋という存在が、経済活動の重要な役目を担っていたことはいままでもないが、一方で、大坂と京との中継地として、地域の文化活動の一つの拠点でもあったことを明らかにしている。中西家旧蔵品のことは意外に忘れられて今日に至っており、今後、速やかに再評価すべき課題である。中西家には、大坂の絵画や工芸品などが数多くあるが、淀藩との関係で、京の美術や書作品も多く遺存している。中西家の旧蔵品を一瞥すると、「文人的香気」、「茶の湯による一座建立」、「漢学の雰囲気」とでも言うべき言葉が浮かび上がる。以下、江戸時代における中西家の文化的位置づけを行い、同時に吹田村と関係する美術工芸作品についてまとめてみたい。

一 田能村竹田と吹田村

竹田の文人画は、江戸後期の中国絵画理解の典型であり、日本の文人画家たちが、真に中国の文人画を理解して絵画を描いたのは、「文人画（南画）の大成者」と呼ばれる池大雅（一七二二—一七七六）や与謝蕪村（一七一六—一七八四）らというよりも、その次の世代の竹田らといった方が適切かもしれない。というのも、竹田の著書『山中人饒舌』などに見られる中国理解は、大雅のそれと比べたときに、一層明白に浮かび上がるからである。この点については、研究者間で議論がかしましいが、この問題について、長文ではあるが、次の鈴木進氏の見解を引用して、その一端を考

えてみたい。

一般に南画或ひは文人画といえば、心象的な風懷を吐露した、多分に余技的なものと考えられがちであるが、一面に、初期南画の作家である百川、大雅、蕪村には、かなり多数の障屏画の大作がみられるのは、注目すべき事実である。(中略)それらは、ときに金屏風に濃彩を施したものであり、北画風な強靱な筆致をみせたものである。また、大和絵風、琳派風なもの、或ひは南蘋風の写生、洋画的遠近法まで撰取した作風さえある。このような自由な触手をあらゆる方面にのばすだけの柔軟な意慾をもつていたのが、初期南画の作家たちであり、これを裏がえしてみれば、固定化した画的制約への反逆であり、また在野的な、町絵師の立場にたつて、現実にはひとしく職業的作家としての精神的なプライドをもちながら、あくまでも市井の俗塵にまみれまいとする抵抗を、どこかにみせてはいる。

この鈴木氏の見解には、興味深い内容が含まれている。すなわち、大雅の絵画は、いわゆる文人画的な作品のみならず、大画面の屏風も多く、大和絵や琳派の技法も垣間見られるということである。鈴木氏は、それらの特徴を、大雅の在野的な抵抗と捉えているが、近世絵画史を大局的に眺めれば、抵抗というよりも、大

雅らの初期文人画家たちは、未だ中国の文人画を十分に理解していなかったのではないかと考えさせられる。要するに、中国の文人画を深く理解したのは、大雅らではなく、次世代の木村兼葭堂から竹田に至る文人画家たちではなかったかという結論に至る。文人画家としての大雅の位置づけについては、研究上、今なお難しい問題が控えており、草卒に結論をだすべきではなく、種々の異論を再検討しながら、今後の研究に期待すべきであろう。いずれにせよ、竹田の山水図は、大雅による深い奥行のある表現とは異なつて、良くも悪くも奥行きが乏しいが、文人画としての性格を強く発信する小画面に優品が多く、それらの絵画における琴線にふれる繊細な線描の見事さを評価しなければならない。

二 池大雅、青木木米から岡田半江、藤澤南岳まで

さて、中西家〔図2〕は、吹田市岸部に所在し、寛文九年（一六六九）以後、明治期まで「東村」として淀藩の領地であった。安政七年（一八六〇）には、淀藩領内の大庄屋・中西家の屋敷地は、東村の領地の最大面積を占め、中西家が所有する屋敷地は四十を数え、全屋敷地数の三十五パーセントを占めていた。中西家に残された作品資料は、絵画、書、陶磁器、漆器など多岐にわたるが、多くは生活用および茶の湯に用いる工芸作品で、江戸時代中期以後の煎茶や抹茶関係の道具類が多数残されている。さらに、書についても池大雅や青木木米、そして、泊園書院の二代院主で



〔図2〕旧中西家住宅

あった藤澤南岳（一八四二—一九二〇）の書など、有名な画家、書家、文人の作品が残されており、江戸時代における吹田市の文人交流の状況が手に取るように理解できる。

加えて、蒔絵を含む漆器類も、江戸時代中期以後の漆器を中心に、多数の作品が残されており、日本の漆器文化の黄金時代を彷彿させる作品群だといつてよい。多くが江戸時代後期から明治に至る食器類であるが、漆器全盛時代の工芸品で、基本的に質が高く、漆芸研究の重要な資料となることは間違いない。また、書では頼山陽、大塩平八郎、池大雅、青木木米、篠崎三島・篠崎小竹、広瀬旭莊、佐藤一齋、藤澤南岳などの書が遺存しているが、これらの人物は、江戸時代の文人交流を裏付ける重鎮ばかりだといつてよい。つまり、これらの文人たちは、江戸時代の文化の中心であった大坂の文化を担った人物たちで、その観点からいえば、中西家の旧蔵品は、いわゆる経済・文化の一つの中心であった大坂の文化に呼応していることを見逃してはならない。繰り返しておくが、中西家作り上げた文化は、決して地方色の強いものではなく、全国区の文化といふべき性格を備えていた。そこには「文

人的香气」、「茶の湯による一座建立」、「漢字の雰囲気」が満ちあふれている。また、絵画では大坂画壇の画家で、堺を拠点に江戸時代前期に活動した曾我二直菴の水墨による《鷹図》（双幅）〔図3〕が遺存しているが、二直菴は、曾我直庵の子として畿内の各地に作品が残されている。さらに、長山孔寅、岡熊岳、森周仙、日根対山、月岡雪鼎らの大坂画壇の絵画が含まれており、京都画壇からは、岸駒、岸慶、岸岱、池大雅、土佐光孚、三島上龍らの作品が見出される。

これらの中西家をめぐる文人たちの交流は、当時の中心地であった大坂（現在の大阪市）のそれとほとんど同じである。関西大学図書館が所蔵する大坂画壇の岡田半江（二七八二—一八四六）筆《山水図卷（大川納涼図）》は、竹田の繊細な作風と重なり合う



〔図3〕曾我二直菴《鷹図》（部分）
（中西家旧蔵・吹田市蔵）

画卷である。半江の友人は大塩平八郎であるが、大塩はまた竹田の友人でもあった。父親の岡田米山人と同様に、藤堂藩大坂蔵屋敷に仕えた半江は、田能村竹田、頼山陽らと交流している。天保八年（一八三七）に親友の大塩平八郎が乱を起こしたのをきつかけに、半江は泉州堺の友人桂園らとの関係などもあって、住吉浜に引越して、その地で弘化三年（一八四六）二月八日に六十五歳で亡くなっている。半江筆《山水図巻（大川納涼図）》は、巻末の落款から、天保十二年（一八四一）六月、半江六〇歳の晩年に制作されたことが判明する。この画卷の題跋は、中西家とも関係のある広瀬旭莊（一八〇四―一八六三）による墨書の題字「濠濮間想」である。巻頭の「濠濮間想」の題字は、半江の友人の半翠（如何なる人物か不明）によって儒者の広瀬旭莊（一八〇四―一八六三）に頼んで書いてもらった墨書である。豊後日田の人である旭莊は、大坂に遊学して摂津池田で死去した。半江の友人の半翠がこの図巻を手に入れた十年後に、零落れた半翠の子孫が、金銭目的で売りに出したこの図巻を手に入れたのが大坂の画家の藤井藍田（一八一六―一八六五）である。藍田は、どうしても欲しかったこの図巻を入手して、詩文の師であった旭莊に跋文を依頼した。藍田は文化十三年（一八一六）あるいは文化十四年（一八一七）に大坂で生れたと記されている。南堀江に暮らし、習字を教え、文人画を描いた。吉田松陰を支持し、勤王の志士の仲間となつて活動して、元治元年（一八六四）の秋、長州藩との内通が発

覚して、新選組に追い詰められた末、幕吏に捕らえられ、翌慶応元年（一八六五）に大坂の獄中で没した。享年五十歳（あるいは四十九歳）であった。こうした経緯からは、当時の大坂における文人交流の連鎖を見てとることができるが、それを図式的に記すと、岡田米山人↓岡田半江↓大塩平八郎↓広瀬旭莊↓藤井藍田↓田能村竹田↓頼山陽↓八木巽旭↓木村兼葭堂↓池大雅と繋がる大坂文化の連鎖である。見逃してはならないことは、こうした人物間の連鎖が、中西家においても見出されることであろう。

三 木村兼葭堂のサロンと中西家文人たち

大坂文化の中心にいた木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）は、十八世紀後半に活動した酒造業の商人で、絵画、書、詩文など多種・多芸の文人として、書画、典籍、博物学の標本類や器物の蒐集を行った。文人画家であるとともに博物学者でもあり、蒐集した資料は数万点に及ぶと伝えられる。これらの蒐集品によって私設図書館、博物館展示室を設けて、全国の文人たちに公開し、いわゆる文化サロンをつくって各地の学者・文人らと交流した。また、二十種類以上の書籍（版本）を出版し、自ら「一角獣」の考証に関する著作をまとめている。兼葭堂の絵画の師は、中西家にも書作品が遺存する池大雅で、他にも鶴亭、大岡春卜、柳沢淇園らにも師事した。また、篆刻の師は、江戸後期の書の流れを決定した高芙蓉（一七二二―一七八四）で、彼は篆刻家で画家でもあった

が、遺存する絵画は限られている。高芙蓉は、江戸時代中期に篆刻の「芙蓉派」を結成し、清朝の世俗的な印章を退け、秦・漢の古い印章を手本にした。そして、芙蓉派は江戸時代後期に篆刻の主流派となった。

また、大典顕常（一七一九―一八〇一）は、相国寺の禪僧で江戸時代中期の漢詩人としても知られていた。近江国の生まれで相国寺で暮らし、日本初の茶経の注釈書である『茶経評説』を相国寺で暮らしていたときに著している。煎茶の祖と言われる売茶翁とも知り合いで、煎茶道を広めたことは周知のことである。中西家には真作とは断定できないにしろ、「売茶翁」の署名のある書作品も遺されていることから、京の文化との繋がりを彷彿させる。兼葭堂宅への訪問客は、文人画家の池大雅（中西家に書作品有り）、同じく柳沢淇園や与謝蕪村、陶芸家で文人画家の青木木米（中西家に書簡あり）、関東の文人画家で洋風画もよくした谷文晁、備前の文人画家の浦上玉堂、田能村竹田（真贋の判定が分かれるが、中西家に絵画あり）、洋風画で知られる司馬江漢、大坂文人画の代表格である岡田米山人（中西家に絵画あり）、大坂画壇の多彩な画家の岡熊嶽（中西家に絵画あり）、兼葭堂の友人で、伊勢長嶋藩の殿様の増山雪斎、儒学者の頼春水と頼山陽（中西家に書作品有り）、そして、本草学者の小野蘭山らである。以上、中西家には、江戸時代の京、大坂で中心的な活動を行った著名な画家や儒者や書家、また、才気ある文人たちの作品が遺っており、作品を

眺めてみると、兼葭堂のサロンと同様とは言えないが、吹田村に文化的な香りを放つサロンといってもよい拠点があったことが明らかになる。

中西家には牲川充信筆《秋草図襖絵》が遺存しており、計八面におよぶ襖絵「図4」は、きわめて珍しいもので、資料価値の高い作品である。この作品一点のみで、これまでほとんど不明であった充信の大坂画壇における事績がある程度明らかになる。充信の襖絵は金銀を用いた華やかな京狩野のような作風で、推測するところ、やはり、京都で活動し、華麗な作風で知られる狩野派の分派である鶴沢派に絵画を習った可能性も高い。そうすると、充信の師は、鶴沢派の祖である鶴沢探山（一六五五―一七二九）となる。充信のみならず、大坂画壇の画家たちの中には、鶴沢派に学んだ画家も多くいることから、充信の出自も範囲を絞ることができるだろう。

また、中西家には作者不詳の襖絵《松に小禽図》が遺存しているが、小さな円弧を繰り返す装飾雲の採用など、京狩野派の作風を想起させるものである。この襖絵については、大坂の狩野派についての調査を行う必



【図4】 牲川充信《秋草図襖絵》
（中西家旧蔵・吹田市蔵）

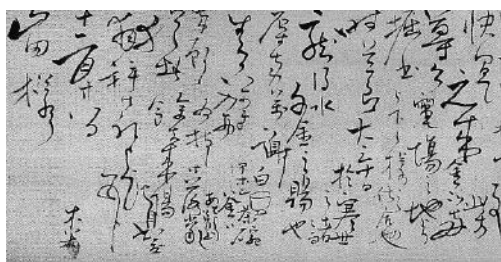
要もあるが、やはり京狩野派、あるいは鶴沢派系統の作風を想定することができるのではなからうか。これら大坂画壇を中心とする画家たちと中西家との関係を問えば、現在の大阪市と吹田市の位置づけは、江戸時代においてはかなり異なるものであることは言うまでもないが、その相違を越えて撰津国という枠組が存在したことも見逃せない。淀藩との関わりから言って、大坂と京との狭間に存在した吉志部東村という場所は重要である。

さらに、中西家に遺存する江戸時代の絵画を検討してみると、江戸時代初期の堺に拠点があった曾我派の二代目にあたる曾我二直菴（慶長年間・一五九六―一六一五年頃没³）の作品《鷹図》（双幅）が見られる。さらに、大坂文人画の代表者の岡田米山人、写生派の長山孔寅などが目につくが、最も目立つのが岸派である。中西家には岸派の祖である岸駒を筆頭に、岸岱や岸慶ほかの門下生の作品が複数存在しており、京との強い関係を仄めかす。また、京の池大雅の書も遺存していることから、中西家が京と大坂と京との文化を共に受け入れて、独自の文化を醸し出していたことにも注目すべきである。加えて、泉州堺の出身で大坂に出て、貫名海屋や岡田半江に師事して活動した日根対山の絵画も遺存している。江戸時代の京とは、元々融合した文化を醸成しており、人的交流は地域を越えてなされていたことは言うまでもないが、さらに細かく考察すると、やはり大坂は多くの大坂の画家たちの文化集合地域であり、京もやはり京都の画家たちの集団を抱えてい

たわけで、中西家旧蔵品に見られる京・大坂を融合させた文化は、吹田村に位置する中西家の性格を明らかに示すものである。

さて、書については、青木木米（一七六七―一八三三）による「山田氏宛書簡」「図5」が遺存しており、大小の文字を自由に拡大縮小しながら自由闊達な書を展開している。行の幅にもこだわらずに書き進めるなど、文人的な趣味を彷彿とさせる。内容は窯場跡出土の白茶碗を金六両で買ってもらった札状である。「金六両為御持被下 大津の骨董家より金壺両やすく候へ」と 此小道具屋大のよく人故 尊公ニ相売申候事⁴」、つまり、一両高い値をつけたが、欲深な骨董家には売らなかつた、と記されている。煎茶器の製作で知られる木米の興味深い足跡を留める一級の書簡であり、大変貴重である。

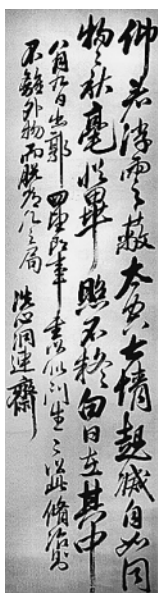
また、江戸時代を代表する儒学者であった佐藤一齋の三行書は、朱子学の四書の一つの『中庸』に基づく書で、嘉永元年（一八四八）、一齋七十七歳のときに中西家のために書かれている。一齋は中国清朝の法帖などを数多く収集して、当時、日本で最も人気の高かつた董其昌の書を学んだ。中西



〔図5〕 青木木米「山田氏宛書簡」
（中西家旧蔵・吹田市蔵）

家と一齋との直接のやり取りから考えて、当時の中西家の文化面での存在の大きさが窺える。款記には「嘉永元年暮為中西子厲／七十七叟一齋坦^⑤」と記された。続いて、頼山陽（一七八〇―一八三二）による草稿《涉成園記》（額一面）は、山陽が東本願寺の庭園「涉成園（枳殻邸）」について感想を記したものである。山陽の書を保持しているということから、中西家が当代の一地方の大庄屋という位置づけを越えて、いわゆる大坂などの中央の文化と直結していることが明らかになる。

続いて、山陽と親しく交流した大坂東町奉行所与力の大塩平八郎（一七九三―一八三七）の「七言絶句」〔図6〕は、大胆で力強い筆力を見せる墨書で、いかにも大塩らしい書の一部を示している。他にも、豊後日田（大分県 日田市）に生まれた広瀬旭荘の書（書簡など）が遺存しているが、岡田半江とも親しかった旭荘もまた、大坂文人サークルの重要な一員であった。弘化五年（一八四八）に旭荘が中西家を訪問したことは、中西家に残る「日間瑣事備忘（写本）」に記されている。この写本は、天保四年から文久三



〔図6〕 大塩平八郎
《七言絶句》
（中西家旧蔵・吹田市蔵）

年（一八三三―一八六三）に至る旭荘の日記で、旭荘の原本を、明治四十三年（一九一〇）に西村天囚が書き写したものである。加えて、梅花書屋を継承した篠崎小竹の「七言絶句」なども遺存している。この他、中西家には隠元隆琦（一五九二―一六七三）と売茶翁（一六七五―一七六三）の書も遺存しているが、この二点の真筆としての正確な判定は今後の研究に俟つとして、興味深いのは、江戸時代を通じて、多くの文人たちの憧憬的であった隠元と売茶翁関連の資料が残っているあたりに、中西家の文化的な「格」の高さを推し量ることができることである。加えて、大坂の漢学塾である泊園書院の第二代院主の藤澤南岳の書（扁額）が遺存しており、中西家が、大坂文化の中核と密な関係を保持していたことが明らかになる。そこに見られる中西家の印象は、先にも述べた「文人的香気」、「漢学の雰囲気」といつて間違いなからう。

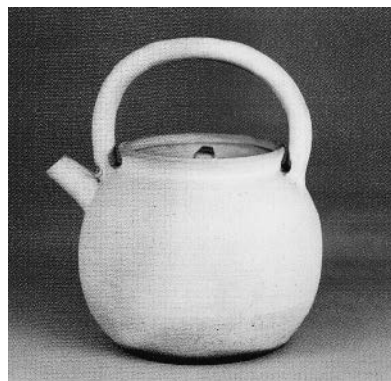
四 日本、中国、朝鮮の工芸

中西家には、絵画や書の他に数多くの工芸作品が遺存しており、日本の茶陶に始まり、中国の煎茶碗、朝鮮の熊川茶碗など多彩であるが、膨大な蒔絵などを見ると、それらは、江戸時代の庄屋の基本的な生活道具類として用いられたと考えられる。中でも、抹茶道具や煎茶道具などの優品が目を惹くが、たとえば、中国清朝（一六四四―一九一三）時代の《白磁煎茶碗》（五客）〔図7〕は、渋くてまことに品格の高い白磁碗だといえるであろう。底面に「成

化年製」の銘をもつが、これは偽銘で、おそらく清朝初期頃に製作されたものと推測されている。⁶⁾ いずれにせよ、この上品さは圧巻である。また、やはり中国製の湯沸かし道具の湯罐(湯瓶)〔図8〕が所蔵されていて、白泥でつくられた湯罐は、薄手に仕上げられており、底が焦げていることから、茶席で用いられたものと思われる。ゆるやかに円弧を描く陶器でできた持ち手や胴の形態は、美しく引き締まっていて、短くつくられた注ぎ口も見事な形を見せている。加えて、朝鮮時代の熊川茶碗〔図9〕が遺存しており、その口縁部は鋭く外に反り返るといふ独特の形にされており、胴は歪みのない、ふつくらとした丸



〔図7〕白磁煎茶碗（中西家旧蔵・吹田市蔵）



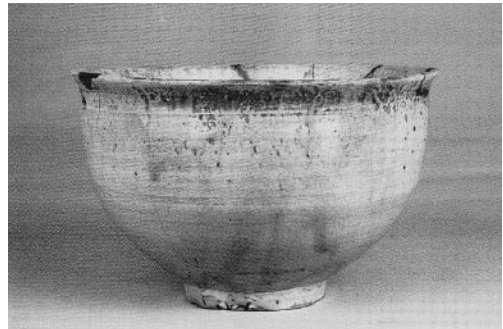
〔図8〕湯罐(湯瓶)
(中西家旧蔵・吹田市蔵)

みを見せる茶碗である。朝鮮慶尚南道にある熊川港から日本に輸入された陶器で、港の名前を採って「熊川」と呼ぶが、朝鮮半島南部の陶器であるには違いないが、今なお正確な生産地は不明である。

さて、中西家に多数遺存する日本の工芸品の中から、寺澤慎吾氏の要を得た解説に従って、三代玉水弥衛兵作(カ)《黒楽茶碗》(十八世紀)〔図10〕を紹介すると、腰に「樂」の印が見られることから、寺澤氏は樂家第三代と推定している。⁷⁾ 玉水焼は、樂家四代一人の子の一元によって、山城の玉水村で創始されたという。樂焼窯で三代弥衛兵(生年不詳―一七六三)は、兄の早世によって後を継いで「任土齋」の号を用いた。筒形の胴をもつ茶碗で、釉薬の所々に赤みのある部分が見られる。口縁部は樂茶碗に特有のゆるやかに波打つ水平線状の形につくられ、内側へと折り込むやり方である。高台は無いに等しいほど低く、光沢のある表面処理は、いわゆる樂に特有のものであるが、まるで焼締の茶碗と思わせる長次郎の光沢のない表面処理とは距離がある。その意味で

は典型的な樂茶碗だとい
つてよい。さらに、中西
家には十四歳で樂吉左衛
門を継いで、文政八年
(一八二五)に隱居して
了入の号を用いた樂家九
代の樂了入(一七五六―
一八三四)の《黒樂菊花
文茶碗》(十九世紀)が所
藏されていることを付け
加えておきたい。

工芸作品では他に、生
活道具としての漆器類が
多数遺存している。こう
した漆器類は、大きな庄
屋には不可欠な道具で、
大雑把に調査すると、中
西家には江戸時代後期か
ら明治時代の質の高い漆
器類が膨大に見られる。
ここでもまた、「茶の湯に
よる一座建立」の雰囲気



【図9】熊川茶碗
(中西家旧蔵・吹田市蔵)



【図10】三代玉水弥衛兵《黒樂茶碗》
(中西家旧蔵・吹田市蔵)

が彷彿されるはずである。

おわりに

以上、これら膨大な絵画、書、陶磁器などから見えてくる中西家の趣味を簡潔にまとめると以下の通りである。

まず、京と大坂の接点にある吹田村という地域の特性が典型的に示されており、兼葭堂を中心とする大坂の中心部と同様の文人たちの交流が見てとれるが、同時に淀藩の影響下に、京の文人や画家たちの書や絵画作品が混在していることから、京、大坂の文化交流の一つの型を見出すことができる。その意味では、江戸時代における吹田村の大庄屋の文化的力量の高さと、文化交流の味わいのある趣味を確認できて興味深い。

また、隠元隆琦や売茶翁関連の資料が残されていることから、江戸時代の黄檗文化を基調にした煎茶趣味・文人趣味の文化的蓄積を示している、これまた京、大坂のいわゆる中央の文化と同様の基調を感じることができよう。煎茶については、「水越興三兵衛作の涼炉や岡田久太作の急須など、日本の江戸時代後期に造られた煎茶器」がある。また、すでに紹介した樂系統の抹茶道具も多く残されている。その意味では、中西家の所蔵作品群は、一地方の文化を表すわけではなく、江戸時代の文化的趣味を担う「中央」の文化を反映し、それを背負っていたといつてよい。

さらに、池大雅、頼山陽、広瀬旭莊、大塩平八郎、佐藤一齋、

そして、藤澤南岳ら当代一流の文人たちとの人的交流および重要な作品による学問的な趣味など、洗練された文人趣味を見てとることができよう。そうした性格を再度まとめると、「文人的香気」、「茶の湯による一座建立」、「漢学の雰囲気」という言葉が鮮やかに浮かび上がるわけである。江戸時代の大庄屋とは如何なる存在であったかを、これらの中西家旧蔵品が明らかにしているといつてよい。重厚な文人趣味を漂わせる中西家の再評価は、喫緊の重要な課題だといっておきたい。

注

- (1) 市村茉莉「竹田と吹田」、『田能村竹田展——吹田・なにわを愛した文人画家——』、吹田市立博物館、平成二十九年（二〇一七）、二一三頁。
- (2) 鈴木進「池大雅筆 龍山勝會・蘭亭曲水圖屏風」、『國華』第七九九号、國華社、昭和三十三年（一九五八）、三二六頁。
- (3) 稲畑ルミ子「曾我直庵・二直菴の絵画」、奈良県立美術館編『曾我直庵・二直菴の絵画』、奈良県立美術館、平成元年（一九八九）、四一頁。
- (4) 吹田市立博物館編『大庄屋 中西家名品展』、吹田市博物館、平成二十四年（二〇一二）、四一頁。
- (5) 同書、四一頁。
- (6) 同書、四四頁。
- (7) 同書、四六頁。
- (8) 同書、寺澤慎吾「中西家に伝わる美術——庄屋の教養と文化」、七頁。

〔付記〕図版は『大庄屋 中西家名品展』（吹田市博物館二〇二二年）図録より

引用した。調査にあたっては、中西容子氏、増田真木氏にお世話になった。深く感謝申し上げます。

The Nakanishi Residence Old Possession (Kishibe, Suita City) —Paintings and Other Art—

NAKATANI Nobuo

Tanomura Chikuden (1777-1835), who had connections with present-day Suita City, made his home at Suita Village in his later years, eventually passing away during travel to the city of Osaka. The Nakanishi Residence, located on the Kishibe, Suita City — which once served as the residence of the village headman—is home to numerous materials pertaining to Chikuden. This paper provides an overview of the old possession (Suita city collection) of the Nakanishi Residence in Suita City associated with Chikuden, referencing their value and priority level.

The Nakanishi Residence, situated in the former Kishibe-higashi village (present-day Kishibe, Suita City), was the house of the village headman and other key individuals of the Yodo Domain. Known as a regional culture center, it housed numerous art pieces as a stopping point between Osaka and Kyoto. Items in the collection include large numbers of paintings and art works from the Osaka area. To summarize the Nakanishi Residence collection in a word, one could think of it as the epitome of the tea ceremony and of cultured life.

キーワード：中西家 (The Family of NAKANISHI)、吹田市 (The City of Suita)、
田能村竹田 (TANOMURA Chikuden)、大坂画壇 (The Osaka Painting
School)